

# 教育における物語的アイデンティティの生成

——共著者としての教師のかかわりを中心に——

学校教育開発学コース 岩 田 一 正

The Process of Generation of Narrative Identity in Education :

Focusing on the Involvement of the Teacher as a Co-author

Kazumasa IWATA

This paper aims to clarify the functions of *otherness* which teacher represents to compose an identity of a child. I try to examine the communicative process through which a child searched for her identity, being involved in exchanging “SOUSAKU NOTES (creative writing notes)” with a teacher. In this examination, I focus on two kinds of otherness, *otherness 1* and *otherness 2*; the one is the otherness in which we can recognize ourselves positively, and the other is the otherness which enables us to estimate ourselves according to the standards of transcendent values. In addition, I rethink the teacher’s narrative in which he appears as a character and as a storyteller. He represents *otherness 1* as the former and *otherness 2* as the latter at the same time.

The results of this consideration are as follows:

First, circulation and transformation of *otherness 1* and *otherness 2* enables a child to search for his/her identity continually.

Secondly, this circulation and transformation can be brought about by the employment of the teacher’s narrative.

Finally, sharing and repetition of storytelling between teacher and child prepare a central place on which the child can compose his/her own identity.

## 目 次

- I. 問題の所在—二種類の他者性—
- II. アイデンティティ探求の萌芽—「創作ノート」の変容—
- III. 物語的アイデンティティの探求—あるいは二種類の他者性の循環—
- IV. おわりに—残された課題—

### I. 問題の所在—二種類の他者性—

子どもは、「他者」とかかわりながらアイデンティティを探求する。そのアイデンティティの探求の媒介となる他者とは、子どもにとってどのような存在なのだろうか。本稿では「創作ノート」と呼ばれる実践において、子どものアイデンティティの探求の営みに教師がどのように

かかわっているのかを検討することにより、アイデンティティの探求の媒介となる他者がどのような存在であるのかについて考察を展開したいと思う。

本稿が取り上げる「創作ノート」とは、ある中高一貫私立校の国語教師、鈴木治（仮名）先生が、中学1年の国語の最初の授業時に、作文や詩の材料探しに利用するために、小説、詩、日々の出来事を、ノートに書いて提出するように生徒に呼びかけて行う実践である。この実践への参加は強制的なものではなく、ノートの提出の日も自由であるが、生徒によっては、鈴木先生が国語を担当しなくなっても「創作ノート」を継続していく。

このような「創作ノート」実践において、わたしたちが特に注目したいのは、実践を継続するうちに、作文や詩を書くという当初の目的から離れ、「創作ノート」をアイデンティティ探求の場とする生徒が現れてくるということである。本稿で取り上げる前田佳代子（仮名）さ

人も、そうした生徒の一人であった。本稿では、前田さんが「創作ノート」を通して鈴木先生とかかわりながらアイデンティティを探求する過程を辿ることにより、鈴木先生が彼女にどのような他者として現前しているのかを検討したいと思う。

ここで、事例の具体的な検討の前提として、わたしたちがアイデンティティを探求する際には、二種類の他者性が要請されるということを確認したい。

アイデンティティの屹立は、わたしたちが自己と呼ぶことができる領域を画定している、ということの意味する。それゆえ、アイデンティティが屹立しているとき、わたしたちは、「経験がそこにおいて展開可能であるような領域を指定する働き」としての「超越性」を備えていることになる（大澤真幸『身体の比較社会学Ⅰ』<sup>1)</sup>）。しかし同時に、わたしたちは、その超越性によって規定される経験の領域を現実的に生きてもいる。つまり、アイデンティティが屹立しているとき、わたしたちは超越的かつ経験的という二重性を帯びているのである。

ただし、その二重性はアприオリなものではない。というのも、超越性は、諸身体の「間身体的連鎖」<sup>2)</sup>の一種の統計学的な効果に基づき投射され、投射した身体から離れて諸々の場に臨在すると想定される抽象的な志向作用だからである。つまり、超越性は、経験の領域を指定するだけでなく、逆にその領域によって構成されるのである。このような超越性が帰属する抽象的な身体の座を、大澤は「第三者の審級」としている。

しかし、一旦構築されると、第三者の審級はこの構築の作業に先立って存立していたかのように擬制され、それを投射した経験を、逆にその意味づけが必然的なものであるかのように、意味づけることになる。この機制に基づき、間身体的連鎖を構成していた諸身体は区別され、第三者の審級に従属するものとして、自己と他者が分離され生成する。

けれども、わたしたち（の身体）は、第三者の審級に従属していない諸身体とも間身体的連鎖を構成し得るものである。この新たな間身体的連鎖は、より包括的な第三者の審級の構築を要請し、その結果、新たな第三者の審級が構築されることになり、その新たな第三者の審級が、再び、先立って存立していた必然的なものとして擬制され、それを構築した経験を意味づけることになる。したがって、第三者の審級とわたしたちの経験のあいだには循環が存在するのである。そして、このことは、第三者の審級はそれへの従属者からの承認により実効的になる、ということを示してもいる<sup>3)</sup>。

ところで、第三者の審級は、わたしたちにどのように

現前するのだろうか。もちろん、第三者の審級は、経験の領域を逸脱しているゆえに、抽象性を有している。しかし、以上で見てきたように、第三者の審級は経験から構築されるものであり、完全なる抽象性には至ることができず、経験とのつながりを必ず持っている。このつながりが最適な状態で具現化したものを、大澤は「理想態」としているが、この理想態は、必然的に両義性を帯びることになる。なぜなら、理想態は、一方で第三者の審級に従属するものであるため、第三者の審級に従属する他の諸身体と同列であるが、他方で第三者の審級に照らして最適であるため、第三者の審級に従属する他の諸身体は、理想態に照らして自らの価値を受け取るからである<sup>4)</sup>。

以上より、理想態から次のような二種類の他者性を取り出すことができる。まず、理想態は自己とともに第三者の審級に従属しつつ、最適の評価を受けていることから、自己の模範、理想像となる模倣可能な他者存在である、とすることができる。それゆえ、理想態は、自己が肯定的に「自分自身を再認する」ことができる側面を持つのである。理想態のこの側面を、本稿では「他者性1」とする。しかしながら、理想態が自己の理想像となるのは、アприオリに決定しているのではなく、それを理想像と見なす価値基準に自己が従属しているためである、ということに注意しなければならない。この価値基準は、自己とのあいだに距離があることにより機能するゆえに、自己にとって模倣不可能な存在である。自己とのあいだに距離がなければ、自己こそ理想態なのだから。理想態のこの価値基準としての側面、すなわち「第三者の審級」を具現化している側面を、本稿では「他者性2」とする<sup>5)</sup>。

以上のように、わたしたちは理想態から二種類の他者性、すなわち、「他者性1」と「他者性2」を抽出したが、このように二種類の他者性を区別することの意義は大きい。以下では、このことについて、本稿の意図と関連させながら述べたい。

本稿の主題は、「創作ノート」において、前田さんがアイデンティティを探求する際に、鈴木先生がその探求の営みにどのようにかかわっているのかを検討することを通して、子どものアイデンティティの探求にかかわる他者とはどのような存在であるのかを考察することである。前田さんにとって「創作ノート」がアイデンティティ探求の場となっているならば、鈴木先生は、彼女とのかかわりにおいて、彼女が鈴木先生のなかに肯定的に「自分自身を再認する」ことができる存在として現前していると考えられる。このような「他者性1」を帯びた存在

がアイデンティティの探求にとって重要なことは、よく指摘されるところである。しかしながら、前田さんが鈴木先生とのかかわりにおいてアイデンティティを探求しているのならば、そのかかわりのなかで構築される超越性を鈴木先生は具現化してもいるはずである、つまり、「他者性2」も帯びているはずである。この超越性が構築されなかったならば、鈴木先生は前田さんにとって「他者性1」を帯びた存在として現前しないのだから。

けれども、他方で、鈴木先生が「他者性2」を帯びた存在として現前するならば、それは、それ以前に前田さんとのあいだに統計学的効果を生み出すような数多くのかかわりがあり、その反復されたかかわりのなかから、理想態としての鈴木先生の同一性が析出したからであり、さらに、この理想態を前田さんが承認しているからである。「他者性1」と「他者性2」という二種類の他者性に注目することにより、以上のことがわたしたちには見えてくるようになる。

ところで、「創作ノート」の事例を検討する際に、わたしたちは鈴木先生が前田さんに、自分の経験を筋立てながら語る言説、すなわち「物語」に焦点を合わせたいと思う。なぜなら、その「物語」において、鈴木先生は、「物語」の登場人物と「物語」の語り手として前田さんに現前し、登場人物としては「他者性1」を刻印され、語り手としては「他者性2」を刻印されており、アイデンティティと二種類の他者性のつながりを明瞭に照らし出してくれると思われるからである。鈴木先生が語る「物語」を媒介しながら、前田さんがアイデンティティを探求するならば、彼女が探求しているアイデンティティは、ポール・リクールが言うところの「物語的アイデンティティ」<sup>6)</sup>と大いに関連することになる。この関連についても、本稿では言及したいと思う。

以上から明らかなように、本稿が注目するのは、授業場面とは異なり、一対一で、しかも「物語」を媒介として営まれる特殊な実践であり、したがって、学校教育においては周縁的な実践である。しかし、それゆえに、かえって子どもと教師の純化されたかかわりの構造が顕在化するのではないだろうか。したがって、「創作ノート」を検討することは、学校において生を営んでいる子どもと、その子どもを取り囲んでいる多数多様な他者存在との関係、特に教師との関係の構造を、そしてその構造を通して析出する子どものアイデンティティを理解する試みの端緒となるのではないだろうか。また、一人の教師に具現化する「他者性1」と「他者性2」を焦点化することにより、「他者性1」と「他者性2」のつながりを明瞭に照らし出すことができるのではないだろうか。さ

らに、子どものアイデンティティにとっての「物語」の意味を明らかにすることができるのではないだろうか。

以上のような見通しを持って、本稿は考察を展開していくことになる。以下ではまず、作文や詩を書く実践として始まった「創作ノート」が、当初の目的を離れ、前田さんにとってのアイデンティティの探求の場へと変容していく過程を、鈴木先生が語る「物語」を手がかりとしながら検討したい。次に、「物語」と「他者性1」と「他者性2」という二種類の他者性を関連づけながら、前田さんの「創作ノート」がどのようにアイデンティティの探求の場として持続していったのかを、鈴木先生が語る「物語」とのかかわりに焦点を合わせることによって考察したい。最後に、以上の検討から得られた示唆、今後の課題を論じたい。

## II. アイデンティティ探求の萌芽－「創作ノート」の変容－

わたしたちがこれから見ていく前田さんの「創作ノート」は、鈴木先生とのあいだで約5年半にわたって編まれたものである<sup>7)</sup>。鈴木先生は、前田さんが中学1年の時の国語の教科担任であり、彼女が高校3年の時にはクラス担任であった。その他の学年では、フォーマルな関係はなく、「創作ノート」を中心としたインフォーマルなつながりが、二人の関係の主なものであった。

ところで、前田さんは、成績は上位にあり、テニス、陸上と運動もこなし、身体も大きく、活発で優しく友人の間での人気もありリーダーシップもあった。それゆえ、周囲の教師や生徒は、「前田(さん)は、なんでもできるから、悩みや憂いなど何もないだろう」と思っていた。けれども、彼女自身は、周囲の評価と、その評価に応える行動をとりながらも、自分は決してそのような人間ではないという思いのあいだで揺れ動いていた<sup>8)</sup>。

このような混沌とした状態にあった前田さんが「創作ノート」を始めたのは、中学1年の10月であり、単に作文や詩だけのためではなく、鈴木先生の「生き方」を知りたかったからであった。「創作ノート」を始めてから約1年後に、彼女はこう語っている。

「このごろですか、シミジミ、創作ノートやってよかったなぁ～と思います。(創作じゃなく、対話という感じで…)なぜ、急に10月ごろ(中1の)はじめなくなったか? もちろん、文の下手を直したかったってということと、授業を受けてきて、先生の内部を知りたかったからです。もちろん、プライバシーとかでなくて、生き方とかを知りたいということ

す。」(中学2年の10月14日)

この前田さんの言葉は、中学入学以降の半年の授業を通して、彼女は鈴木先生のなかに、自分自身のものとは距離を感じながらも、しかし、それに近づくことにより自己が開かれていくような生き方を見て取った、ということを示している。このことは、彼女自身が自らの生き方を探求していたことの裏返しであり、また、半年の反復されたかかわりのなかから、鈴木先生が「理想態」として屹立したということを表している。

しかし、彼女の生き方への志向だけでは、作文や詩を書くことが目的の「創作ノート」を、生き方の探求、すなわち、アイデンティティ探求の場とはできない。なぜなら、「創作ノート」は、彼女と鈴木先生のかかわりによって編まれているのだから。実際、彼女は「創作ノート」を始めた当初は、作文と詩だけを書いている。それゆえ、わたしたちは、彼女の生き方への志向に対する鈴木先生のかかわりも見なければならぬ。そして、そのかかわりにおいては、鈴木先生が語る「物語」が大きな意味を持っている。

先程述べたように、前田さんは当初、作文や詩だけを「創作ノート」に書いている。それに対して、鈴木先生はその作文や詩にアドバイスをしたり、本を紹介したりしている。しかし、鈴木先生は、毎回ではないが、それらの他に、彼女の作文や詩に触発され、彼女と同じ年頃の時の自らの経験を語ってもある<sup>9)</sup>。たとえば、前田さんが「海!？」と「手」という二篇の詩を書いてきたとき、鈴木先生は次のように書いている。

「話はわかりますが、ぼくが君と同じ年頃のことを思いました。(中略)いなかの中学ですから、中卒で就職する人もいましたが、その人たちを全部あつめて、お別れの会を催したことがあります。その日はぼくの入試の前日でしたので先生に叱られましたが、友だちはとてもよろこんでくれ、後々まで手紙をくれました。君を見ていると、性質の似ている点があるように感じますがどうですか。」(中学1年の10月以降)

作文や詩へのアドバイスの他に、このような「物語」、すなわち、前田さんがそのなかに肯定的に「自分自身を再認する」ことができるような登場人物として鈴木先生が現れている「物語」を読むことによって、理想態としての鈴木先生が帯びている「他者性1」が、彼女にとって実際に近接し得るものとなるだろう。また、鈴木先生は、作文や詩だけではなく、彼女自身の思いを語るように、「君を見ていると、性質の似ている点があるように感じますがどうですか。」と促してもいる。その結果、

この二つのことが絡み合い、自らの経験やそれに対する思いを「創作ノート」に書き込み、鈴木先生に読んでもらってもよいだろうという前理解が彼女に構築されることになるだろう。

実際、鈴木先生がこの種の「物語」を反復して語っていることは、前田さんが「創作ノート」に書くことに変化を与えている。彼女は作文や詩だけではなく、それらの前や後ろに自分の経験、作文や詩が生まれるに至った過程などを書くようになり、ついには作文や詩を書かなくなり、自分の経験やそれに対する思いだけを書くようになっていったのである。このことは、以前は「創作ノート」からは排除されていた自らの経験や日々の思いという外部テキストが、テキストとして顕在化し、最終的にはテキストにはそのみ書き込まれるということ、したがって、前田さんの「創作ノート」そのものが変容したということを表している。そして、それは、彼女の「創作ノート」が、作文や詩を書くという当初の目的を離れ、アイデンティティの探求の場に変容していったことを意味している。

以上で見てきたように、自らの生き方を模索していた前田さんは、授業における反復されたかかわりから彼女にとっての理想態として屹立した鈴木先生の生き方を知ろうとして「創作ノート」を始めたのだが、その生き方への志向が、理想態である鈴木先生が語る「物語」によって許容されることにより、彼女の「創作ノート」は当初の目的を離れ、アイデンティティの探求の場へと変容することとなった。

しかし、「創作ノート」が、アイデンティティの探求の場へと変容することと、そのような場として持続することは異なっている。なぜなら、理想態としての鈴木先生の生き方を知ろうとして「創作ノート」を始めた前田さんにとって、鈴木先生の生き方と自らの生き方が近接しすぎれば、「創作ノート」を継続する意味が薄れ、アイデンティティの探求の営みも静止することになり、また、逆に、鈴木先生の生き方に自らの生き方が全く近接できなければ、鈴木先生の生き方は、前田さんを抑圧する存在として現前することになるのであり、したがって、「創作ノート」が、彼女のアイデンティティの探求の場として持続するには、鈴木先生と前田さんのかかわりのなかで、前田さんが変容するだけではなく、鈴木先生も新たな理想態として屹立し続けなければならないからである。そこで、以下では、前田さんの「創作ノート」が、どのようにしてアイデンティティの探求の場として持続していたのかを、鈴木先生が語る「物語」に焦点を合わせながら考察したいと思う。

### Ⅲ. 物語的アイデンティティの探求—あるいは二種類 の他者性の循環—

わたしたちのアイデンティティが構成される過程について、リクールは次のように述べている。

「実際に、ある人あるいはある共同体のアイデンティティは、大部分、それによってその人あるいはその共同体が自分自身を再認する価値、規範、理想、モデル、そして英雄との（中略）同一化から構成されている。～のなかに自分自身を再認することは、～によって自分自身を再認することの一因となるのである。」<sup>10)</sup>（強調は著者）

つまり、わたしたちは理想、英雄など、すなわち理想態と自らを同一化することにより、それらをアイデンティティの構成に取り込むことができるのである。そして、この同一化には、「物語」と二種類の他者性が大きくかかわっているように思われる。そこで、以下では、「創作ノート」において、前田さんがどのようにアイデンティティの探求を継続しているのか、また、彼女のアイデンティティの探求に鈴木先生が語る「物語」がどのようにかかわっているのかを検討することを通して、このことを論じたいと思う。

理想態に照らして負の評価を受けるならば、わたしたちはその理想態に抑圧されかねない。「創作ノート」に即して言えば、前章の最後で述べたように、前田さんにとって理想態として屹立している鈴木先生に具現化する「他者性2」に照らし、彼女が負の評価を受け続けるならば、「創作ノート」は前田さんを抑圧するものとなりかねない。それゆえ、アイデンティティの探求の持続には、彼女と鈴木先生のかかわりにおいて、彼女がそれに照らして正の評価を受けるような「他者性2」を、鈴木先生は刻印され続ける必要がある。

ところで、理想態がわたしたちを抑圧するのは、それがわたしたちに先立つ必然的なものとして、わたしたちに現前しているからではないか。つまり、理想態の歴史性が隠蔽されているからではないだろうか。歴史性が見えないからこそ、わたしたちは理想態をアプリアリなものと措定し、過剰に評価してしまう。それゆえ、理想態の歴史性を見ることができれば、わたしたちにとっての理想態そのものの意味が変容することになるだろう。そして、理想態の意味の変容に連動して、理想態を最適なものとしている「第三者の審級」も、逆に、その理想態を最適としていることによって変容し、新たな「第三

者の審級」が構築されることになるだろう。さらに、以前の「第三者の審級」を承認していた／に従属していたわたしたちも、理想態として屹立している人物が同一人物であることによって、新たな「第三者の審級」をも承認する／にも従属することになるだろう。

したがって、前田さんの「創作ノート」がアイデンティティ探求の場として持続するには、彼女にとって理想態として現前している鈴木先生の歴史性が開示される必要があると思われる。つまり、鈴木先生が自らの「過去」を物語ること。実際、既述したように、鈴木先生は前田さんと同じ年頃の時の自分の経験をしばしば語っている<sup>11)</sup>。では、鈴木先生がそのような「過去」の経験を語っているとき、彼女はどのようにそれに応えているのだろうか。具体的に見てみよう。たとえば、次のようなやりとりなど象徴的なものである。

前田さんは、高校1年の6月16日に、自分は鈴木先生と比べると若々しさがなく、日常のわずらわしさから逃れるために本へと向かっており、行動はあくまでも暗くしゃべらない感じである、と書いている。それに対して、鈴木先生は、次のように語っている。

『「ちっとも若くない、暗くしゃべらないといった感じ』とあなたは言いますが、それは自分を深く見つめるようになってきた証拠です。子どもの時は心の姿勢が、外に多くむきがちです。でも次第にそれが自分を見つめることが多くなっていくとぼくは思います。（中略）自分の将来はどうなんだろうと自信喪失のような思いにとらわれます。何をどのようにしていいのかわからず、おもしろくないものだらけといったような感じになります。一般的ではないかも知れませんが、ぼくはそのような思春期をおくりました。どうもあなたもぼくと似ているんじゃないかなあと思います。

そんな時どうしたか、ぼくは、『赤と黒』（スタンダール）とか、モーパッサンとか、フランス文学を中心に、乱読。大人の世界を知ろうと思ったんでしょうね。ずいぶん読書をしました。心をドキドキして読みました。級友たちのにぎやかな笑い声を聞くと、自分の方がオトナだと思いました。何しろ大人の世界に片足くらい入っているわけですから（思い上がっていたのかも知れません）。……

ともかく、あなたの文章を読んで思ったことは、ああ大人に近づいているんだなあということ。そして、似ているなあということ。』

この鈴木先生の言葉に対して、前田さんは次のように応えている。

「先生と似ているという所を読んで安心しました。何も話さず、本ばかりに夢中になる学生時代より、無理をしてでも、みんなとキャーキャー言っている方が価値ある思い出になり、高校生らしいんじゃないか? と不安になっていたのが、本当に良かったナとホッとしました。

先生と似ている……と考えるとうれしくなっています。(先生にはお気の毒なことです……) いつかは先生の様になれるかもしれない! という期待や、さまざまなことが混ざって。私はオールマイティでも何でもありません。みんな中途半端です。(中略) 悲しいことです……。(高校1年の7月1日)

鈴木先生と前田さんのこのやりとりは、そのなかに肯定的に「自分自身を再認する」ことができる「他者性1」を帯びた存在がどのように現前するのか、「他者性1」と「他者性2」はどのようにつながっているのか、そして彼女のアイデンティティの探求がどのように持続していくのかをよく表している。

鈴木先生に刻印されている「他者性2」に照らせば、負の評価を受けると思われる自分の現状を書くことにより、前田さんはその現状の評価を理想態としての鈴木先生に委ねている。これに対して、鈴木先生は彼女と同じ年頃の自分の経験を語っているが、その「物語」において、鈴木先生は彼女がそのなかに肯定的に「自分自身を再認する」ことが可能な登場人物として現れている。このことは、鈴木先生に新たな「他者性1」を帯びさせることとなり、彼女の模倣を促すことになる。しかし、これはことの一面でしかない。なぜなら、彼女が登場人物としての鈴木先生のなかに「自分自身を再認する」ことができるとしても、登場人物としての鈴木先生が、彼女が承認/従属している「他者性2」によって、正の評価を受けなければ、それは「他者性1」を帯び、前田さんに対して模倣を強く駆り立てることにならないからである。

ところで、彼女が承認/従属している「他者性2」は、現在の鈴木先生に刻印されていた。そして、前田さんと鈴木先生のかかわりは、「創作ノート」におけるものが主なものであった。したがって、彼女が承認/従属している「他者性2」は、語り手としての鈴木先生に刻印されていることになる。また、彼女にとって、語り手としての鈴木先生は、登場人物としての鈴木先生の延長上にある人物であり、両者には必然的あるいは蓋然的なつながりがある。それゆえ、語り手としての鈴木先生に刻印されている「他者性2」は、登場人物としての鈴木先生

と親和的なものであることとなり、その結果、登場人物としての鈴木先生は、「他者性1」を帯びることになる、と彼女には思われる。ゆえに、前田さんは、「他者性2」に照らして正の評価を受けつつ、登場人物としての鈴木先生を模倣しようとする、すなわち、アイデンティティの探求をすることになるのである。

前田さんと鈴木先生のこのやりとりによく表れているように、鈴木先生が語る「物語」を媒介として、登場人物としての鈴木先生が、彼女にとっての新たな「他者性1」を帯びることにより、彼女のアイデンティティの探求は持続することができるのである。ところで、なぜ「物語」はアイデンティティの探求に大きくかかわるのだろうか。

そもそも「物語」とは、出来事の要素を単なる時系列に沿って並べたものではない。そうではなく、偶然の結果を必然性あるいは蓋然性の結果へ変換する<sup>12)</sup>「筋立て」によって、出来事の要素を理解可能なものとして統合した言説こそが、「物語」である。それゆえ、出来事は「物語」として語られることによって、人間にとって理解可能なものとなるのである。また、「物語」の登場人物のアイデンティティも、この「筋立て」によって構築されるのである<sup>13)</sup>。それゆえ、わたしたちが「物語」の登場人物に同一化することは、この「筋立て」を取り込むことでもある。

このことを本稿の文脈に即して言えば、次のようになる。鈴木先生が自らの過去の経験を筋立てて「物語」とすることにより、その経験は偶発事ではなく、必然性あるいは蓋然性のあるものとなる。このことは、その経験が帰属する登場人物としての鈴木先生を、必然性あるいは蓋然性を刻印された存在とする。それゆえ、前田さんが、登場人物としての鈴木先生のなかに「自分自身を再認する」ことができ、登場人物としての鈴木先生が新たな「他者性1」を帯びることとなれば、彼女は登場人物としての鈴木先生を模倣して、自らの経験を必然性あるいは蓋然性のあるものとして意味づけようとするようになる、つまり、登場人物としての鈴木先生によって「自分自身を再認」しようとするようになるのである。そして、この意味づけは、鈴木先生が語る「物語」の「筋立て」によって成立するものであるゆえに、「他者性2」を刻印されている語り手としての鈴木先生によって、正の評価を受けることになる。わたしたちは、このように言うことができるだろう。

したがって、「筋立て」がアイデンティティの探求の基底に存するがゆえに、「物語」はアイデンティティの探求に大きな意味を持つのである。「物語」とかかわり

ながら探求されるアイデンティティを、リクールになら  
ない、「物語的アイデンティティ」とする。

ところで、上述した前田さんと鈴木先生のやりとりの説明は、事態の十分な説明ではない。なぜなら、登場人物としての鈴木先生が新たな「他者性1」を帯びることは、逆に、語り手としての鈴木先生に刻印されていた「他者性2」の変容を導くからである。けれども、新たな「他者性2」は容易には生じない。それを端的に表しているのは、前田さんの「いつかは先生の様になれるかもしれない!という期待や、さまざまなことが混ざって。(中略) 悲しいことですが……。」という言葉である。つまり、彼女にとっては、自らの現状が、一方では正の評価を受けるように思われ、他方では負の評価を受けるように思われているのである。この両義性は、「他者性2」が安定していないことを意味する。

このような両義性が導かれるのは、次のような理由による。「他者性2」は、鈴木先生と前田さんのかかわりから投射されたものでありながら、一旦生成すると、そのかかわりに先立って存立していた必然的なものとして現れる。また、「他者性2」は、前田さん自身が承認していることにより、実効的になっている。それゆえ、彼女は、自らの現状に対する負の評価でさえ受け入れなければならないのである。しかし、鈴木先生の「物語」により、新たな「他者性1」が現れることは、その現状に正の評価を与えることになる。つまり、同じ現状に対する二つの異なった評価が下されるのである。したがって、新たな「他者性2」の生成が求められることになるが、従来の「他者性2」が必然的なものとして現前しているために、その生成は困難なのである。

さらに、この両義性は、「物語的アイデンティティ」に必然的に伴う不安定性とも関連する。なぜなら、「物語」は、単なる時系列に沿った出来事の要素の連鎖とは異なるゆえに、いくつかの筋を編むことができるからである<sup>19)</sup>。つまり、前田さんは、自らの現状と理想態としての鈴木先生がつながる「筋立て」を編むことができると同時に、つながらない「筋立て」を編むこともできるのである。また、「筋立て」そのものを編むことができないということもあるだろう。

それでは、どのようにして、この両義性を肯定的に作用するように方向づけることができるのだろうか。前田さんと鈴木先生のかかわりが、わたしたちに示唆を与えてくれる。つまり、既述したように鈴木先生は、反復して自分の過去の経験の「物語」を語り、その一方で前田さんは、その「物語」を繰り返し読み反復して味わって

いるのである<sup>19)</sup>。このことは、アイデンティティの探求における反復の重要性を示している。

反復が重要なのは、次の理由による。繰り返し鈴木先生の「物語」を読むことによって、前田さんは、その「物語」を参照点として、以前の自分と現在の自分とを比較しつつアイデンティティの探求を反復して展開できる。その結果、たとえ、それぞれの探求が、前田さんにとって異なった「筋立て」を帰結するものであっても、その反復された差異が、前田さんの具体的な経験と絡みながら、包括的な「筋立て」の屹立をもたらすことがあるだろう。また、前田さんの経験と「物語」の登場人物としての鈴木先生の経験とのあいだに類似性がないこともあるだろう。しかし、そのような場合には、鈴木先生が新たな「物語」を語ることになり、上述したようなやりとりが繰り返されることになる。そして、このことは、より包括的な「他者性2」を生むことにつながるだろう。それゆえ、鈴木先生が反復して「物語」を語り、前田さんがその「物語」を反復して読むことは、両義性を肯定的な作用へと収束させ、物語的アイデンティティの不安定性を抑制するのである。

わたしたちは、以上のように、鈴木先生が語る「物語」とのかかわりのなかで、前田さんがどのようにアイデンティティの探求を継続していたのかを検討してきた。その検討を踏まえた上で、わたしたちは、次のように言うことができる。

子どもがアイデンティティを探求する際には、二種類の他者性、すなわち「他者性1」と「他者性2」が要請される。しかし、その探求の営みの持続には、二種類の他者性の現前だけではなく、その他者性を具現化している他者存在との反復されたかかわりを通して、「他者性1」と「他者性2」が、連動しながら意味を変容させていくことも必要である。そして、特に、「他者性2」の変容には、反復が大きな意味を持つ。また、子どもと他者存在とのかかわりにおいては、「物語」がとりわけ大きな意味を持つ。なぜなら、「物語」に子どもが「自分自身を再認する」ことができる登場人物が現れているならば、「筋立て」を媒介として、「他者性1」と「他者性2」が結びつき、連動すること、そして、子どもが登場人物と同一化しようとすることによって、子どもは「筋立て」により自らの経験を必然的あるいは蓋然的に意味づけることになるからである。したがって、子どもと反復されるかかわりを持つ教師が、「物語」を反復して語り、子どもがその「物語」と反復してかかわることによって、アイデンティティを探求するならば、すなわち「物語的アイデンティティ」を探求するならば、教師は子ども

もの「物語的アイデンティティ」の「共著者」であると言えよう。

以下では、ここまでの考察から得られた示唆、ここまでで言及できなかった点を論じたいと思う。

#### IV. おわりに—残された課題—

わたしたちが見てきた実践は、子どもと教師の二人だけのかかわりを通して、子どもがアイデンティティを探求する実践であった。それゆえ、学校教育の実践においては、非常に特殊なものであることを認めざるを得ない。しかし、二人だけのかかわりに注目したことにより、十分なものではないにせよ、かえって子どものアイデンティティの探求と他者存在のかかわりの構造の、ある側面を明瞭に照らし出すことができたのではないだろうか。以下では、教師に焦点を合わせながら、本稿から得られた示唆と、今後の課題を述べたい。

二種類の他者性、すなわち「他者性1」と「他者性2」を手がかりとしながら、子どものアイデンティティの探求にとっての、反復、「物語」それぞれが持つ意味を、わたしたちは見てきた。ここでは、まず、反復の意味を述べたい。

「創作ノート」実践は、アイデンティティの探求の事例としてよく引き合いに出されるような「劇的な」実践ではなく、長期にわたって継続することによって意味を持つ日常的な実践である。わたしたちが見てきたように、前田さんが「創作ノート」に参加する以前の、彼女と鈴木先生の反復されたかかわりから、鈴木先生は理想態として屹立したのであり、また、「物語」を媒介とした反復されたかかわりにより、理想態としての鈴木先生に刻印されている「他者性1」と「他者性2」の意味が変容することになり、彼女はアイデンティティの探求を継続することができたのであった。ところで、そもそも学校とは、子どもと教師あるいは子ども同士のかかわりが、非常にコンデンスされた状態で反復される場ではないだろうか。したがって、わたしたちは、学校空間が孕んでいる反復の営みによって、子どものアイデンティティの探求を照射してもよいのではないだろうか。

次に、教師が語る「物語」が子どものアイデンティティの探求にとって持つ意味を述べよう。アイデンティティの探求にとって「物語」は大きな意味を持つ。なぜなら、わたしたちは、自らの経験を「物語」として筋立てることによって、必然的あるいは蓋然的に意味づけることができるからである。このことは、「物語」が言説として顕在化していない場合でも、わたしたちは自らの経験を

「物語」として筋立てることによって意味づけている、ということを示唆する。それゆえ、わたしたちのアイデンティティは、そもそも「物語的アイデンティティ」である、とすることができるのである。とすると、子どもが自らの経験を意味づける際の、共著者としての教師に、わたしたちは改めて注目しなければならない。

わたしたちが見てきたように、鈴木先生は、自らが語る「物語」において、登場人物としては「他者性1」を刻印され、語り手としては「他者性2」を刻印されていた。そして、その二種類の他者性は、前田さんのかかわりのなかから生じたものであった。かかわりのなかから二種類の他者性が生じるという点において、教師は二種類の他者性が刻印される人物としての可能性を持つ。なぜなら、まず、制度的に教師と子どもは、異なった存在だからである。しかし、これだけでは、教師は理想態として屹立しない。というのも、理想態としての屹立には、子どもの承認が必要なのだから。では、なぜ教師は、理想態として屹立する可能性を持つのだろうか。それは、教師が先達だからである。教師が、子どもの前にいる自分を自分とした経験を背後に持っており、子どもが教師を通して、その背後に自らのものと似ている経験を見出すからである。したがって、先達として二つの存在を現前させながら生きるからこそ、教師は、子どもの物語的アイデンティティの共著者となる可能性を持つのである。それゆえ、わたしたちは、教師がどのように複数の存在として子どもに現前するのを見ていく必要がある。

このことと関連して、第二章の最後で言及しながら、扱わなかった点について述べよう。それは、前田さんと理想態としての鈴木先生が近接しすぎた場合、つまり、アイデンティティを探求する子どもと理想態が近接しすぎた場合、どのように子どものアイデンティティの探求が持続するののかということである。たとえば、「創作ノート」に限って、前田さんの場合を考えれば、鈴木先生によって、数多くの文学作品、映画などが引用されたり、言及されていることが注目に値する。このことは、前田さんの知的好奇心を刺激し、彼女にその文学作品を読み、その映画を見ることを促さないではないだろう。そして、それらの文学作品や映画に触れることによって、彼女には、鈴木先生の背後の世界の厚みが増して見え、鈴木先生に近接不可能な相を刻印することになるだろう。したがって、わたしたちは、教師が、どのようにして子どもに対する複数の存在としての現前を維持しているのかも見ていく必要があるだろう。

反復と「物語」を手がかりに、学校空間で生じている教師と子どもの多数多様なかかわりを見ていくことを、



今後の課題としたい。

(指導教官 佐藤学助教授)

## 註

- 1) 大澤真幸『身体の比較社会学Ⅰ』勁草書房, 1990, 7頁。
- 2) 間身体的連鎖とは、諸身体のあいだの志向作用の交換として理解できる。
- 3) ここまでの議論は、大澤の前掲書の58-63頁を参照されたい。
- 4) 同上 127-134頁。
- 5) 二種類の他者性の区別については、大澤の『電子メディア論』(新曜社 1995 p.251-258)を参考にした。
- 6) 「物語的アイデンティティ」については、詳しくは *Soi-même comme un Autre* (Paul Ricoeur, Paris, Seuil, 1990), 特にその第五研究と第六研究を参照されたい(以下SAと略す)。なお、SAからの引用は、英訳書 *Oneself as another* (trans. Kathleen Blamey, Chicago and London, University of Chicago Press, 1992)を用い、必要に応じて原書を参考にしながら、筆者が和訳したものである。引用ページは、原書のページを記し、その後ろの括弧内に英訳書のページを入れることにする。
- 7) 本稿で扱う事例の資料は、鈴木先生に対して筆者が行ったインタビュー、前田さんの「創作ノート」(全6冊)、前田さんが鈴木先生に送った手紙、鈴木先生から筆者が頂いた手紙・葉書である。  
また、前田さんの「創作ノート」のなかには、日付を特定できるものもあるが、その他はおおよその日付を判断できるだけであり、特定はできないということをここで述べておく。さらに、前田さんは日付を書いていることがあるので特定できる場合があるが、鈴木先生はほとんど日付を書いていないので、特定できないということも付け加えておく。そこで、鈴木先生が書いている部分から引用する場合には、おおよその目安として、引用部分の後ろの括弧内に前田さんがノートを提出した日付を(可能な場合には)入れておくことにする。  
なお、前田さんは1979年度に入学し、1984年度に卒業している。
- 8) 実際、卒業してから9年後に鈴木先生に送った手紙の中で、前田さんは、次のように語っている。  
「ノートに時々書いたつもりですが、いつもうまく話せないことや、勇気のないことがいやでいやでたまりませんでした。こう言うとみんな『見かけによらないねえ』と言うのですが、その、自分でも凶太そうと思える大きな体やこわそうな顔に似ず、意外に気の弱い自分を隠そうとしたり、出そうとしたり、混沌としていました。」
- 9) 鈴木先生によれば、想起された経験すべてが鈴木先生自身のものなのではなく、友人などから聞いたものもあるという。しかし、鈴木先生は、とにかく自分の経験として「物語」を語るという。
- 10) SA, p.146-147 (p.121).
- 11) 鈴木先生は、「このノートに何やかやと記していると、いつしか、幼年期、少年期のことをよく思い出します。」(中学2年の12月4日)と記してもいる。
- 12) SA, p.169-170 (p.142).
- 13) SA, p.175 (p.147-148).
- 14) Ricoeur, *Time and Narrative*, vol. 3, trans. Kathleen Blamey and David Pellauer (Chicago and London, University of Chicago Press, 1988) p.248-249. 久米博訳『時間と物語』Ⅲ, 新曜社, 1990, 452頁。
- 15) 前田さんは、以前に書かれた文章、特に鈴木先生によって書か

れた文章に繰り返し言及し、以前の自分と比較しながら、現在の自分について語っていることがある。たとえば、次のように。

「先刻、前のノートを読み返していました。(中略)よく鈴木先生が、「僕は少年時代の頃と中味は変化していないように思います」と話して下さったことが、今、とてもよく理解できます。中味、今の私の中味は、中一、中二の頃とちょっと変わっていません。(中略)何も変わっていないのに、今のままだと、何か失ってしまいそうな危機感をもっていたようです。確かに何も成長しないというのもコマリモノですが、無理に成長したようにするよりはずっと、何もしない方がマシだと思っています。」(高校1年の11月9日)

付記) 本稿を書き上げることができたのは、「創作ノート」実践の豊富な資料のおかげである。貴重な資料を提供し、発表の承認に協力して下さいました鈴木先生と前田さんに深く感謝したい。